

玉川教育におけるチャレンジコースの意義

村井伸二, 難波克己

The Challenge Course, A Significant Education Tool in Tamagawa Education

Shinji Murai and Katsumi Namba

Tamagawa University Research Institute Machida-shi, Tokyo, 194-8610 Japan.
Tamagawa University Research Review, (2013)

Abstract

The purpose of this study is to identify the meaning of the Challenge Course and its value of integrating Experiential Based Learning into Tamagawa Education. The Challenge Course have been developed and utilized by Outward Bound Program in Europe in 1940's. This unique educational tool has so much history over 70 years spreading its popularity worldwide since its inception. However, Tamagawa Academy and University is the first educational institution to integrate the adventure based program into the school curriculum in this country. It has been for 13 years since Tamagawa Adventure Program have been integrating adventure education into K-12 and University education. The goal for Tamagawa Adventure Program is to facilitate positive educational outcomes such as enhancing self-esteem, communication, team-building and trustful relationships among students within a scope of Zenjin-Education philosophy. The researchers suggest that positive effect of using the Challenge Course that can be seen in mental health, physical fitness, and community development, furthermore, this tool could be used to support healthy growth for students. Tamagawa Adventure Program continues to devote adventure learning to meet Tamagawa's mission for the future.

キーワード：チャレンジコース, アドベンチャー教育, 体験教育, 全人教育

Keywords : Challenge Course, Adventure Education, Experiential Education, Zenjin-Education

1. はじめに

「一体あんなところで何をしているのだろうか」玉川学園小学部の芝生から経塚山を見上げると一見不思議な光景を垣間見ることができる。地上8~10mに張ってあるケーブルの上にヘルメット, ハーネス姿でクライミンググローブとつながっている人が見える。その姿は楽しいというよりもむしろ真剣な顔そのものであり, この光景がとても摩訶不思議に感じてしまう。このようなユニークな施設が玉川学園内には存在する。これはチャレンジ

コース(ロープスコース)と呼ばれ, 1960年代アメリカを中心に野外教育施設や学校などから広がりを見せ発展を遂げてきた教育施設である。我が国における最初のチャレンジコースは1995年に建設され, 現在では日本全国に約70カ所の屋外, 屋内施設において目的に合わせてデザインされたコースが存在している。

玉川学園では2000年にチャレンジコースが設置され, 心の教育実践センター(tamagawa adventure program 以下 tap)が運営, 管理を行ってきた。さらに tap は K-12(幼稚部から高学部)や大学・大学院, そして他の

教育機関、企業などを対象とし、全人教育を基盤としたアドベンチャー教育としての体験学習を取り入れたプログラムが展開され、心の教育の実践活動としての経験を積み重ねてきた。

諸外国では野外教育施設を中心に設置されてきたチャレンジコースが日本の学校教育において最初の施設として建設されたことを考慮すると我が国のアドベンチャー教育にとって大きな一歩であるといえる。さらに学校教育においてグループワークといった体験を通じながらお互いが認め合い尊重することによって個人の自尊心を高め、グループとしての成長を目的やねらいとした授業や行事を実施できる可能性を見せた。

このように、欧米を中心に発展してきたアドベンチャー教育としての体験学習プログラムが我が国において玉川教育を中心に学校教育へ取り込まれ、どのように発展させていくかについて検討を重ねていくことはとても有意義であると考えられる。

よって本稿ではアドベンチャー教育としての体験学習プログラムにおいて玉川学園のtapが先駆的に学校教育に取り組み、活用しているチャレンジコースについて解説を行い、玉川教育とチャレンジコースの意義、そしてこれからの展望について考えていくことにする。

2. チャレンジコース（ロープスコース）の背景

チャレンジコースはロープ、ケーブルや木材などで構成され、屋外や屋内にアドベンチャー的要素を含んで障害コースの様に設計されており、それらのユニークなコースを使ってグループワークを応用し、個々での関わり合いとチームワークに必要な身体面、精神面に対するチャレンジを促進するものである。

チャレンジコースそのもののルーツは立ち木やロープなどを使用し、森の中に自作で作り上げていくものが多かったことからロープスコースと呼ばれていた。しかし、技術の発展や安全性の向上に伴いロープスコースを建設する企業が増加していった。それに伴う器具の開発や技術革新によりロープの代用でエアクラフトケーブル（工業用ケーブル）が使用され、安全性と耐久性を獲得することができた。このように今ではロープスコースではなく“ワイヤーケーブルのコース”へと変貌を遂げたのである。最近ではチャレンジするコースという意味合いをより強調して「チャレンジコース」と呼ばれることが多いのである。

そこで、本稿ではチャレンジコース（現在でもロープスコースと名称している施設もある）と記述することとする。

チャレンジコースを語る際にアドベンチャー教育における体験学習について語らなければならないが、本稿では頁数の制限もあり、簡単な歴史に触れながらチャレンジコースを解説していくことにする。

アドベンチャー教育における教育者、そして哲学者として青少年教育に多大な貢献を残した Kurt Hahn (1886-1974) は第1次大戦中ドイツのザーレム校を開校して校長職を務めていた。当時からアドベンチャー教育活動を行っていたが、ナチスからの迫害を受ける。その後、イギリスの教育者のネットワークによって Hahn はイギリスに亡命。以来、スコットランド、ゴードンストーン学校を開校し、再びアドベンチャー教育活動を行う。そして、第二次大戦中にイギリス海軍の依頼により Hahn がもともと行っていたアドベンチャー教育の考えとして青年達の精神と身体との調和の取れた人間を育て、身体的チャレンジのレベルを高め、生き延びる術を身につけることをねらいにした「Outward Bound」という概念を築きあげていく。この Outward Bound とは「外洋に出る」といった意味であり、本来のシーマンシップとしての訓練である帆船トレーニングなどが行われたことから、後のチャレンジコースへと発展していったことが由来である。

その後、Outward Bound の理念は大陸を渡りアメリカで発展を遂げていく。アメリカコロラド州に Colorado Outward Bound School が開校され、その Marble Base Camp において初めてのチャレンジコースが * Outward Bound School (以下 OBS) のインストラクターらによって建設された。これを機に、チャレンジコースは OBS や野外教育活動において遠征活動を行う前のグループワークやリーダーシップなどを学ぶ為にトレーニングの一部として活用された。

後に OBS 活動のアドベンチャー的要素を学校教育に取り入れ、チャレンジコースを活用しながらアドベンチャー教育の普及に貢献した教育団体として 1971 年に設立された Project Adventure (以下 PA) が挙げられる。PA は当時 OBS やキャンプ場などに建設されていたチャレンジコースを学校だけでなく医療機関、福祉施設といった様々な分野に広がりを見せた。その結果、アメリカでは 12,000 を超えるチャレンジコースが存在し、現在ではアメリカだけに留まらず、オーストラリア、ニュー

ジーランドそして日本をはじめとするアジアなど世界各国においてチャレンジコースが発展していった。

アメリカのPA Inc. (PA本部) がチャレンジコースについて1992年に行った「20 years Safety Study」では475施設の回答からチャレンジコース建設状況を調査した。その結果17%がキャンプ場、7%が病院、1%は地方自治施設、16%は野外教育施設、41%は学校、11%大学、そして、16%はその他であった。その他は福祉事業施設、青年活動施設、グループワークトレーニングセンター、スカウト団体、宗教団体、治療施設、家庭裁判所プログラムであった。このようにチャレンジコースは教育機関への発展だけではなく特にアメリカにおいては医療や福祉といった分野にも活用されるという多様性を見せた。この発展に寄与したPAの影響は大きいことが伺える。(図1)

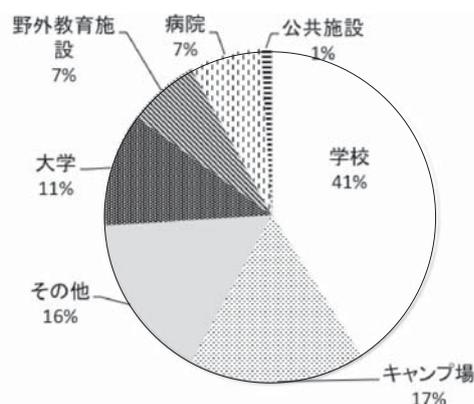


図1 アメリカのチャレンジコース施設状況 (Project Adventure, Inc., 1992)

3. チャレンジコースと各種教育団体

チャレンジコースが普及されると同時にアドベンチャー教育としての体験学習は様々な分野において教育的効果を発揮していく。そのような中、体験教育という視点からの教育組織が設立された。一方、チャレンジコースにおいては技術面からの安全性、普及に関して協会組織が設立された。このことでアドベンチャー教育としての体験学習と共にチャレンジコースはさらなるステージへと上がっていったといえる。

① 体験教育協会 Association for Experiential Education (AEE)

AEEの背景として1970年代初頭アメリカのノースカ

ロライナ州、ブーンという町にその当時の教育をより生徒達に体験を通して価値の高い学びを提供したいと望んでいた教育者のグループが集まり、その実現を目指したのがAEEの始まりとされている。

AEEは教育、レクリエーション、野外教育、アドベンチャープログラミング、環境教育、メンタルヘルス、青少年育成、障害を持つ人のプログラミング、サービスラーニング、組織開発などの領域において、世界33カ国、約1,100人以上の会員を有し、アメリカにおいて年に一度の国際学会が開催されている。

② チャレンジコース技術協会 Association for Challenge Course Technology (ACCT)

この組織の使命はチャレンジコースの建設業界にあって安全基準を設けることであった。1994年には建設における安全基準の制定に貢献を果たした。1998年にはコース設置基準の施設運営に関する安全マニュアルを出版した。現在は第8版が2012年に出版され、世界中に2,500名を有したメンバーは組織に発展してきている。授業その中でも8%~10%はアメリカ国外のメンバーで占められている。主な活動は器具用具類の安全基準の検査や設定、認定資格者の育成、学会等による情報発信等である。学会のメンバーには傷害保険業界者、弁護士、大学教員、技術者、公園管理者、キャンプ場管理者、野外教育・アドベンチャー教育関係者、エコツーリズム関係者などによって占められている。

4. 日本のチャレンジコースの現状

諸外国からのアドベンチャー教育としての体験学習におけるチャレンジコースは我が国にも影響を与えた。1995年に初めてのチャレンジコースが山梨県長坂町日野春(現在:北杜市長坂町)にプロジェクト・アドベンチャー・ジャパン(以下PAJ)のPAJモデルコースとして設置された。

以来、PAJの普及活動によって日本全国にチャレンジコースの建設が広まり、現在では日本全国に約70以上の様々な領域に応じた施設がコースを設置している。その内訳を見ると、38%が民間の施設、26%が国公立青少年教育施設、15%が行政の施設、11%が学校、6%が大学、そして4%が野外活動センターとなっている。(図2)。

また、年代別で見ると2009年頃までは、国公立青少年教育施設や学校、行政といった教育に視点を置いている施設が多かったのに対し、2010年以降は民間施

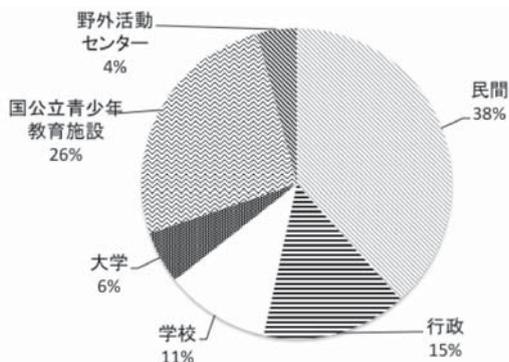


図2 チャレンジコース施設状況（プロジェクト・アドベンチャー・ジャパン，2011）

設においての建設が増えている。これらの施設は教育の目的だけではなく観光・娯楽性を兼ね備えたジップラインコースといったアミューズメントパーク施設に建設されたことから多彩な可能性を見せたのである。このように、チャレンジコースの目的や使用方法も時代やニーズの変化によってその目的と適応領域が多様化してきている。

例えば、「アドベンチャー EX」（ベルギー，EXPONENT 社が開発）というコースは自分で器具を使いながら安全を確保して活動するコース（スタティックビレイコース），さらに、「フォレストアドベンチャー」（フランス，ATLUS 社が開発し，日本では 13 施設が存在する。）といった個々で安全を確保（セルフビレイ）しながら自然の中で活動することで，木々の中でレクリエーションを目的としたコースなどもある。これはキャノピーツアーと呼ばれる熱帯雨林のキャノピーの上にコースを作り，エコリズムにおいて普及したことから始まっている。特に中米，東南アジアで普及されているものである。このように，チャレンジコースは教育だけに留まらず，さまざまな分野で使用されながら多様性を見せている。アメリカを中心とした海外諸国においてはチャレンジコースの普及とともに多種多様なチャレンジコースの建設，運営会社が現れ発展してきている。我が国においても諸外国に見られるように多様性の時代に突入したのではないかといえる。

そのような流れの中で，玉川学園では 2000 年に tap としてアドベンチャー教育としての体験学習プログラムを取り入る際にチャレンジコースが建設された。このチャレンジコースは我が国において学校教育機関の屋外施設として日本で初めてのものである。他の施設でのチャレンジコースの用途が多様化していく中で，玉川学

園のチャレンジコースはあくまで教育的効果に重きを置いている。命綱（クライミングロープ）を用いて安全確保する方法をダイナミックビレイと呼ぶが，個人のチャレンジに対してチームで確保（チームビレイ）をすることにより，個々とグループの関わりをサポートし，心と体の安全を考えながら行動していく。そのことで，個々と他者がお互いに尊重し合うとことでグループとして成長していくことを目的としている。このことを考えても，玉川学園の教育基盤である全人教育とアドベンチャー教育としての体験学習との融合性を備えた教育として新たな期待が持てる。

5. 玉川学園におけるチャレンジコース

tap は玉川学園の全人教育の実践としてのプログラムの一つとしてチャレンジコースを行うが，全てのプログラムにおいてチャレンジコースが使用されている訳ではない。それには参加対象のねらいや参加の状況，時間などによってプログラムが計画され，実行されるからである。ここでは tap で行われてきた各対象に応じたねらいとプログラム展開を表している（表 1）。

このように全人教育を体験的に実践することを目的とし，プログラム展開している中で tap におけるチャレンジコースを活用した活動は様々な用途に向けて開発されてきたものである。ここでは tap としてのアドベンチャー教育プログラムとしてチャレンジコースを活用したものを紹介しながら内容を紹介していく。

まず，チャレンジコースは大きくローエレメントとハイエレメントとに区分することができる。今現在，tap のチャレンジコースはハイエレメント 10 基，ローエレメント 9 基を使ったプログラムが行われている。

①ローエレメントの意味付け

ローエレメントは地上 30cm～50cm の高さにワイヤーが設置され，ビレイシステム（クライミングロープを使用しながら参加者の安全を確保する）を必要としないものとされている。ローエレメントは課題に応じて個々とグループの目標に対して身体面，精神面において参加者同士のサポートを促すような工夫が成されている。ローエレメントの特徴としてそれぞれのエレメントには安全を確保する「スポッティング（参加者同士が安全確保を行い）」が必要になり，この方法や課題，そして目的やねらいによって使用方法が異なっている。

表1 tapにおけるプログラムの展開

	ねらい	プログラム・対象
小学部	<ul style="list-style-type: none"> ・相互尊重 一生懸命に 自他ともに楽しく 心と身体の安全を守る ・コミュニケーション 	4年生 体育 4年生 サマースクール（ハイエレメント体験） 教員研修「学級経営におけるtapの応用」 実習生対象プログラム 保護者対象プログラム
中学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルスキルの向上 ・多様性の尊重 ・自己効力感の向上 ・自己開示のための主張 	7年生 総合学習「人」 8年生 カナダナナイモ短期留学事前研修 8年生 アメリカハーカースクール短期留学事前研修 部活ごとのチームビルディング活動
高学部	<ul style="list-style-type: none"> ・アドベンチャー精神を育む ・グループでの課題解決型活動を通してコミュニケーション ・協調、協力、信頼、責任、意思決定といったソーシャルスキル 	10年生 家庭基礎 12年生 特別授業（玉川大学教育学部への内部進学決定の生徒対象） 9～12年生 自由研究「リーダーシップ研究」 国際交流プログラム「台湾稲江高校」 国際交流プログラム「ブラジル松柏・大志万」 国際交流プログラム「ドイツゲーテ高校」
大学・大学院	<ul style="list-style-type: none"> ・自己発見と自己概念の肯定的変容 ・リーダーシップのスタイル学習 ・人間関係や意思決定 ・目標設定、意思決定、合意形成、パラダイムシフト、コミュニケーション 	教育学部
		1年生 新入生オリエンテーション「人間関係作り」 2年生 箱根キャリア演習「自己・他者発見と理解」 2～4年生 サービスラーニング
		文学部人間学科
		1年生 セミナー 101「良好な人間関係構築」「意思決定」
		工学部機械情報システム学科
		1年生 セミナー 102「良好な人間関係構築」
		芸術学部
		1年生 セミナー 101「コミュニケーション」
		課外活動
		体育会・文化会 主将主務リーダーズトレーニング 部活ごとのチームビルディング活動 ・玉川大学ソーラーチャレンジプロジェクト 「チームビルディング」「リーダーシップ研修」
<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育におけるアドベンチャーアプローチの導入、講義、演習 	教職大学院	
		心の教育実践研究コース

このローエレメントはアドベンチャー的要素を含むことによりチャレンジャーへの個々とグループにおけるコミュニケーション、協力や信頼といったものを身体面、精神面において促進するものである。よってこのローエレメントを使用できるまでにアイスブレイキングやウォームアップを行うことによって身体面、精神面の準備ができていくかどうかの観察が必要になってくる。またグループとしての成長、そしてプログラムのねらいや目的によっては更なる活動としてハイエレメントがあるとも考えられ、ローエレメントのプログラムにおける意味付けがとても重要になる。

②ハイエレメントの意味付け

ハイエレメントに関しては約15mの木製のポールにビレイケーブルと呼ばれる命綱の支点をかけるためのケーブルや参加者に足をかけるためのフットケーブルといったものが取り付けられており様々な体験が出来るよう工夫されている。各エレメントには参加者1人で活動するものや2人で協力するもの、そして地上8m～10mの所に取り付けてあるケーブルや丸太などの上に乗って横に移動するもの、さらにクライミングの様に垂直方向に上下移動しながら活動するものなど様々である。

ハイエレメントは命綱を使用してチャレンジャーの安

全確保を行う。これは命綱というロープでチャレンジャーとビレイヤーとが相互につながっていることに意味がある。何かあったときには必ず安全を確保しなければならないが、活動中にロープを引っ張りすぎて安全を確保し過ぎるとチャレンジャーのアドベンチャーを奪ってしまう。そこで相互のやり取りが必要となってくる。さらに、ビレイヤーはチームとしてのユニットといった役割が重要となり、これはチームビレイと呼ばれるものである。このチームで各自の役割を果たすことで心理的構築を促し相互尊重、信頼関係などを個々とグループが体験的に気づき合うことができるのである。

チームビレイではビレイロープと呼ばれるとチャレンジャーと確保者（ビレイヤー）とがクライミング用具を通じてつながることによって安全に活動が行うことができる。また、ビレイヤーはチームとなり、ビレイヤーから出るあまりのロープを処理し、いざという時は第2、第3のビレイヤーとなる（第2ビレイヤー、第3ビレイヤー）、参加者が登る為のハシゴを準備し、参加者が上（ケーブル位置）から降りてくる時に体重差で確保者が地上から浮いてしまうのを押さえる人（アンカー）などの役割がある。このようにグループとして安全を確保することで信頼しながら参加者は自分なりに挑戦することができるのである。

ビレイチームが成り立つということで地上における各自の役割に対して責任を持ってこなしていく。そのことでチャレンジャーは信頼した環境の中、自分のチャレンジに挑もうとする。このチームでのビレイシステムが相互の信頼関係を構築していくのである。

6. tap のチャレンジコースプログラム

他の施設ではない K-12 から大学・大学院、玉川学園の職員研修など、さまざまな対象にプログラムが提供されている。ここではアドベンチャープログラムとして tap ではどのようにしてチャレンジコースを活用しているのか、例を挙げながら説明していく。

①短期プログラム（イベント型）

小学部では4年生に夏休みのサマースクールにおいて2日間のハイエlement体験を行う。カーゴネット（網の目になっているロープを頼りに地上からタワーとなっていて上にプラットホームがあり、そこまで個々の目標に応じて登っていくもの）やキャットウォーク（地上

8m～10mの高さに丸太が横付けにして左右のポールに固定され設置してある。チャレンジャーは丸太の上をビレイロープで確保されながら横に移動する活動。）などを体験する。このようにハイエlement体験は児童たちにおいてリスクに対して挑戦することで個々の達成感を獲得し、児童同士で同じ体験を共有しながら協力とは何かを学ぶ機会となっている。

大学生においてはリーダー研修の一環として、部活動の主将、副主将や運営員などが対象となる「リーダートレーニング」を実施している。2日、3日のプログラムの中で大学生たちはアイスブレイキングなどを行うことで安心な環境を設定し、課題解決やローエlementを体験することによって協力や信頼を学んでいく。また、ハイエlement体験をすることで個々とグループとの関わりによって相互理解や相互尊重などについて具体的な体験からリーダーシップとは何かを学ぶのである。

②プロセス重視型プログラム（授業型）

高等部の撰択体育の授業では、生徒たちがハイエlementを体験することから、エlementに必要な用具について、ロープワーク、ビレイの仕方、また、チームとしてのビレイの方法などを順序だてプロセスを経て体験的に活動することで体験→学び→教える（学びの提供）ことをチャレンジコースでの体験学習サイクルによってリーダーシップや他者への尊重、安全への配慮など人間関係に必要な根幹を学習する目的として取り組んでいる。毎回2時限分の時間枠を上手に活用し、体験をしながら安全を確保（ビレイ）をるところまでを体験的に学んでいる。授業ではアイスブレイキングや課題解決、そしてローエlementではスポッティングを通じて安全について段階的にグループワークを行いながら学んでいくことでハイエlementに取り組んだ生徒がチャレンジコースの一連の確保システム（ビレイシステム）を学習することができる。

7. チャレンジコースの可能性

現在の社会状況を考慮し、これから向かっていく時代での教育環境を見据えながら、玉川教育におけるアドベンチャー教育としての体験学習を活かすためのヴィジョンを構築していく必要がある。ここでは実際、欧米に存在する様々な状況に応じ、オリジナリティを備えたチャレンジコースを紹介しながら今後の可能性について説明

することにする。

①レクリエーションタイプのチャレンジコース

チャレンジコースの活用方法はさまざまであり、レクリエーションタイプ、教育タイプ、イベントタイプなどがある。未だ日本では設置されていないが、ポータブルアドベンチャーといったタイプが存在する。このポータブルアドベンチャーとはトラックの荷台に直立リフトがついていて、立てるとクライミングウォールになる。クライミングジムのようなもの、ベルトコンベヤのように回転をして、ホールドが下から上がってくるのを、動くホールドの変化に合わせて位置を変えていくものがある。

さらなる特徴があるコースとして、縦長のゴム製の大きなチューブを立てて体育館の天井に金具で上に固定をする。巨大な縦長のオブジェのようなクライミングチューブに空気を入れて立てる。ゴムの材質は船を停泊させている時に突堤と船の間に衝突予防ブイと同じ硬質ゴム製で利用されているものがある。このように海外におけるチャレンジコースのバリエーションの多さには驚かされる。

②学校教育タイプのチャレンジコース

学校環境を考慮した場合について、建築基準なども影響していると思われるが、屋外に電柱を立ててコースを建設するには土地も必要である。そのため、都会型のコース建設に関して多くの学校では体育館を利用して室内施設を設置している。中には、アドベンチャー活動専用の体育館まで設置されている。アメリカでは体操競技専用の体育館やあるスポーツ種目に特化した体育館（Gym）を建設している学校もある。

屋外のコースは空間と良い環境、特に緑地や森林に囲まれていると理想的だが、日本の都心の現状では玉川学園のように恵まれた環境は希有である。そうすると、全天候型の体育館に設置をすれば通常の体育・スポーツ活動は壁と天井近くの空間を利用してチャレンジコースも設置できる。むしろ日本型のアドベンチャーコース環境を作ることができると思われる。室内であれば屋外施設の雨ざらし器具と異なり、耐久性が長くメンテナンスコストも節約できるであろう。1970年代にすでにPA Inc. (Project Adventure Incorporated) のコース建設技術者と同時にトレーナーであったカール・ロンキ (Karl Rhonke) はインドアチャレンジコースの作り方という

本を出版していた。これにより、普及のスピードが増したことを考えると、彼のチャレンジコースにおける貢献は多大である。

③社会の課題に対応したチャレンジコース

現在、福島県の原因の問題において危険指定地域の学校は放射能の影響で屋外施設、運動場などは使用できず、体力テストにおいて、影響が見られ子ども達の運動不足が起因した肥満が危惧されている。肥満予防の対策として福島市内の小学校については体育の時間以外に週1回～2回の肥満予防運動の時間を取りながら実施している。この状況でこそ、広場がない、運動場が使えないという視点を変えて、体育館や既存の建築にアドベンチャーコースを設置又は増設をすれば、運動不足の解消だけでなく、同時に社会性と情動面に肯定的な効果を見越せる新たな体験学習が可能ならずである。現在の状況だからこそインドアコースを使うことで、子ども達、地域の人々の健康管理の為にチャレンジコースの役割は大きいと考えられる。実は、コースの存在の有無ではなく、アドベンチャーベースドプログラムの本質的な教育手法は様々なアクティビティの中に意図されている教育的効果を個人と個人が関わり、グループを形成していく過程の中に心理情緒面、身体面の発達を促すように創られている。単に運動不足解消に対する対処法ではなく、被災した後の心理面、精神面の健康に関しても人の繋がりから互恵関係や肯定的な共同体の成合が子ども達の心と身体の成長を支えていき、大人にとっても地域共同体の再構築から生きる糧と意義を見出すきっかけになることが予想される。

チャレンジコースの存在は今や学校教育における教育器具のみならず、レクリエーションとしての公共施設、低年齢の子ども達にとっての遊びを通して心身の発達に関わる施設とプログラムがある。さらに、高齢者にとっても地域の関わりの中で身体面、運動を通して、認知面の維持/発達、地域の関係向上活性化、過疎地域に移住する若者・家族の地域溶け込み対策としてのコミュニケーション環境を整える手段として利用できる。根本的に人が人と関わる上で信頼関係を構築していくプロセスを大事にしながら共同体を築いていく策として応用が可能である。

今後、福島県のみならず、家族や人が新しい土地に移住をする時代を迎える、それは人口密度の変化より医療福祉領域では外国からの労働力を目的とした住人を迎え

る未来である。日本人が過去に行われてきた隣組感覚や集団で生きる力が本当に継承してきたかが試される時代を迎えることであろう。

8. まとめ

本稿では玉川教育の基盤である全人教育とアドベンチャー教育としての体験学習のツールとして特にチャレンジコースに焦点を当てながら、その経緯や玉川学園での取り組みについて説明し、また、玉川教育からの発信として、チャレンジコースの将来の可能性について述べた。

我が国において、アドベンチャー教育としての体験学習に伴うチャレンジコースの分野では、実践に関するさまざまな効果や結果を追求していくための研究体制を整える努力を重ねている最中である。だからこそ、玉川学園のtapは全人教育の実践として、アドベンチャー教育や体験教育を活用し、今後、チャレンジコースのあらゆる情報を教育関係機関等と共有しながら教育的効果や意義を先駆的に発信する立場にあるといえる。

チャレンジコースの価値は我が国にも広がりを見せ、玉川学園のtapでは体験を基盤として、生徒、学生が卒業後に教育者や社会人としてこの体験や経験を経て、更なる人間成長していくことを目指している。

これからの我々が進んでいく時代は先が読みにくく青少年にとっての未来には困難が待ち構えているかもしれない。この見えない“大波”に立ち向かい乗り越えようと挑むことも我々が捉えている「アドベンチャー」という航海なのかもしれない。その挑戦することにさらなる生きる力を獲得していく要素があるのではないだろうか。

今年度でtapとチャレンジコースは13年目を迎えた。チャレンジコースと共に、これからの新しい時代に向けて、変化や進歩が必要となってくる。玉川学園にこのユニークなアドベンチャー教育のシンボルとしてのチャレンジコースが活用されていることに再度、尊敬の念と感謝をしながら教育に貢献していきたいと考えている。

これからも目を輝かせながらヘルメットをかぶろうとしている生徒、学生のために日々アドベンチャーは続くのである。

解 説

※ Outward Bound という概念は Kurt Hahn によって 1941 年にイギリスで提唱され、アメリカにおいてスクールとして発展していった。OBS は野外教育を中心に体験学習、遠征教育において、自己開発、リーダーシップなどについて学ぶことができるプログラムを提供している非営利の教育組織である。今現在、世界 33 以上の国々が活動を行っている。日本では 1989 年に長野県小谷村において Outward Bound School Japan が設立された。

引用・参考文献

1. Karl Ronke, Don Rogers, Jim B. Wall, Catherine M. Tait. "The Complete Ropes Course Manual fourth edition." Kendall/Hunt Publishing Company, 2007
2. Steven E. Webster. "Ropes Course Safety Manual an instructor's guide to initiatives, and low and high elements." Kendall/Hunt Publishing Company, 1989
3. Bob Ryan. "The Guide for Challenge Course Operations an essential reference for Challenge course practitioners. A Project Adventure, Inc., Publication, 2005
4. David E. Wood, James C. Gillis, Jr. "ADVENTURE EDUCATION." A National Education Association Publication, 1979
5. Jim Schoel, Dick Prouty Paul Radcliffe, "Island of Healing A Guide to Adventure Based Counseling." Project Adventure, Inc., 1988
6. Bruce Martin, Cristine Cashel, Mark Wagstaff, Mary Breunig. "Outdoor Leadership Theory and Practice." Human Kinetics, 2006
7. Project Adventure; Dick Prouty, Jane Panicucci, Rufus Collinson. "ADVENTURE EDUCATION Theory and Applications." Human Kinetics, 2007
8. Simon Priest, Michael Gass. "Effective Leadership in Adventure Programing." Human Kinetics, 1997
9. Mark Zelinski, Gary Shaeffer, OUTWARD BOUND THE INWARD ODYSSEY, Beyond Words Publishing, 1991
10. Edutopia, *The New PE Runs on Fitness, Not Competition*, <http://www.edutopia.org/new-physical-education-movement-video>
11. Association for Experiential Education, <http://www.aee.org/>
12. Association for Challenge Course Technology, <http://acctinfo.org/>
13. Outward Bound, <http://www.outwardbound.org/>
14. Project Adventure, Inc., <http://www.pa.org/>